

市長コラム

キャッチボール 第23球


 きあんこう
 世界に羽ばたけ市之川の輝安鉱

「別子銅山」といえば、新居浜市にある鉱山だということは皆さんご存じだと思いますが、実は西条市にも市街地からわずか10分程度のところに、輝安鉱を産出していた「市之川鉱山」が存在していたことはあまり知られていません。

世界で名高い評価を得て、研究者の見学も絶えることのない鉱山跡なのに、何とももったいないことです。

その市之川鉱山の価値を広く知っていただくため、8月21日「世界に羽ばたけ市之川の輝安鉱シンポジウム」を開催しました。お盆明けの残暑厳しい中にもかかわらず、市之川鉱山に興味を持たれている市民の皆さんが、想像以上に多かったことにほっとしました。

シンポジウムでは、本市出身で、材料工学の第一線で活躍されている原田広史先生と、そのご縁により、ケンブリッジ大学から材料科学の世界的権威、コリン・ハンフリーズ教授にゲストとして出席いただきました。原田先生の母校である西条高校が、スタディーツアーで同大学と交流していることも幸いしました。

ハンフリーズ教授は、開口一番

「世界では、西条よりも市之川のほうが有名だ。結晶の大きさで世界一とされる市之川の輝安鉱が、イギリスの大英博物館など世界10カ国、18博物館に展示されている。西条市に世界に誇れる財産が身近にあったことを、多くの人に知ってほしい」と私たちに呼びかけました。



コリン・ハンフリーズ教授



世界で評価の高い輝安鉱

この輝安鉱はアンチモンという金属の原料鉱石で、昔は主に砲弾の材料として使われていました。そのため、江戸初期に再発見された市之川鉱山も「戦争鉱山」との異名のとおり、日清戦争のあった明治中期に産出の最盛期を迎えました。その際、他に類をみない結晶の大きさで美しさを誇る輝安鉱を多く産出したことから、学術的に非常に価値の高いものとして世界からの称賛は一気に高まり、当時は、どれくらい立派な市之川の輝安鉱を所有しているかによって、その研究機関の格が決まるとまでいわれたそうです。

身近なところでは西条郷土博物館にも「世界重要鉱物標本」に登録されるほど貴重な結晶が展示してあります。しかし、やがて1957（昭和32）年に産出量の減少とともに閉山します。

現在ではこのアンチモンはレアメタルの一つとして、蓄電池の電極や触媒、半導体への利用など、工業材料として使われています。

このように学術的にも世界的価値を誇る市之川鉱山跡を管理する住友金属鉱山株式会社に、周辺整備についての協力をお願いしていたところ、早速、坑道の入り口である「千荷坑（せんがこう）」坑口までの見学路を整備してくださいました。

市としましても今後は、鉱山跡の周辺整備や市之川公民館に保管されている資料等の展示公開、ホームページやガイドブックでの情報発信を進めていきたいと思っております。

幸い西条高校物理部の生徒もこの遺産の調査・研究を進めており、西条の誇る世界的遺産が次の世代にも受けつがれようとしていることを喜ばしく思います。こうした活動とも連携しながら、市之川鉱山をキーワードにシビックプライド（地域の誇り）を醸成していきたいと思っております。

多くの皆さんに市之川の素晴らしさを知っていただき、訪ねてほしいですね。



「千荷坑」坑口前



市之川鉱山の資料などを展示・保存している市之川公民館